

第二回矢板市俳句いろはかるた大会



優勝したハッピーズ

一月十八日に、矢板武記念館で第二回矢板市俳句いろはかるた大会が開かれました。三人一組で六チームが出場しました。優勝したのは、矢板小学校二年生の仲良し三人組でした。このチームは（和智有里子さん、岸末沙姫さん、赤木万南日さん）女の子ばかりで、昨年もお出しでしたが入賞できず、今年こそはと猛練習を重ねて出場したということでした。大人だけのチームとも対戦しての優勝だけに、賞状を受け取ると三人の喜びは頂点に達し、何度も何度も歓声を上げていました。

矢板市俳句いろはかるたはこうして作られた

このかるたは平成元年に作られたそうですが、その存在はごく一部の人のしかり知られず、長い間眠っていました。そこで、このかるたを市民の方に広く知っていただきたいと、市に呼びかけたのが「渡辺登美子さん」です。



渡辺さんは、現在「ともなり文芸祭り」の俳句撰者であり、その当時このかるた作りに携わられたことから、いろいろお話を伺いました。

■このかるたが作られたキッカケは？
これは矢板市制三十周年記念事業として作られたものです。その中心が、俳句会の撰者であった川

俣瑞穂先生（故人）を通して、矢板市の観光地や史跡等を大いにRRしようという強い思いがあったようです。



川俣先生は矢板の文化発展に貢献され、文化協会の副会長にも着かれまされた。広報やいたに「矢板俳壇」を設けられ、その後、短歌、川柳、詩の文芸欄へと発展したという経緯があります。

■読み札はどなたが作られたのですか？
大半は瑞穂先生のものですが、その他は俳句会のメンバーが作り、最終的には瑞穂先生に添削をしていただき完成したものです。



■絵札はどなたが描かれたのですか？
川俣先生の水墨画の指導を受けた会員の福田恵州さん（故人）に描いて頂きました。福田先生は俳句、水墨画ともに嗜まれ、かるた作りに貢献してくれました。

三武道合同鏡開き参加者の声



◎空手のコーチをしているのご夫婦 篠崎章（六十八歳）と禮子さん（六十二歳）は四十年近く空手の指導をしており、四歳から六十五歳までの方を教えてください。以前は矢板在任でしたが、現在は壬生から来て教えてくださっているとのこと。

一男の剛さん（三十三歳）も空手をこの武道館で学び、二十代の頃は国体の選手だったそうです。剛さんは今日も武道館に来て、一緒に学んだ先輩や後輩たちと笑顔で歓談していました。



◎中学生になっても空手を続けている仲間たち
五、六歳の頃から友たちと一緒に空手を始め、習い続けていた中学生三人に聞きました。手塚くんは矢中二年で弓道部。父親と弟も空手をしているそうです。鈴木くんは片池くんは片中一年で同じサッカー部に所属。一緒に習い始めた友たち

【記者からのコメント】
毎年鏡開きには当日成人式を迎えた生徒や以前学んでいた生徒たちが式場から武道館へ直に訪れるのが恒例になっているそうです。今日も楽しく歓談したり、写真を撮影していました。武道を通して先輩、後輩の絆を感じました。（K・H）